

モーツァルト:ヴァイオリン・ソナタ 第22番

1778年春に作曲された、若きモーツァルトの瑞々しいヴァイオリン・ソナタ。マンハイムのアロイジア・ヴェーバーに恋をして、その一件で父レオポルトに叱責され、パリ行きを命じられた時期の作品。2楽章からなり、第1楽章はソナタ形式。二重奏的な性格が強く、楽章中にも頻繁に現れるピアノとヴァイオリンのユニゾンが強いインパクトを残す。第2楽章は変奏曲形式。ドルチェの指定がある愛らしい主題に6つの変奏が続く。第4変奏にはピアノのカデンツァが置かれている。

ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第5番《春》

ヴァイオリン・ソナタ第5番は、《春》という通称の由来ともなった第1楽章冒頭のテーマをはじめ、軽やかで美しいメロディが全編にちりばめられ、ベートーヴェンのメロディ・メーカーぶりが遺憾なく発揮されている。第4番と同時期に作曲が進められたが、楽章構成が3楽章から4楽章へと拡張され、洗練された展開部の書法とも相まって、見事な統一感を示している。《春》という副題は他者によって付けられたものだが、この曲を聴く者なら誰しも感じるであろう、新緑の鮮やかさや頬を撫でる春風の心地良さを表現したネーミングと言えよう。

イザイ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ 第6番

1924年に作曲された《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ》(全6曲)は、それぞれがイザイの敬愛するヴァイオリニストを念頭に書かれ、この第6番はスペイン出身のマヌエル・キロガに捧げられた。単一楽章で、華麗なヴィルトゥオジティにあふれている。中間部にはスペイン風ハバネラのリズムが奏され、華やかさに一抹の哀愁を添える。

イザイ:子供の夢

1894年に生まれた息子アントワーヌのために書かれた作品。子守歌のような、ゆったりとした浮遊感のある旋律が、子どもへの深い愛を感じさせる。出版は1901年。

R.シュトラウス:ヴァイオリン・ソナタ

1887~88年にかけて作曲されたシュトラウス唯一のヴァイオリン・ソナタは、交響詩《ドン・ファン》(1889)などで注目を浴びる以前に書かれた初期の作品。3楽章からなり第1楽章はソナタ形式。冒頭から澁刺とした若さがあふれ出し、ヴァイオリンの優美な旋律が伸びやかに歌う。第2楽章は三部形式で、「即興曲」と題されている。ロマンティックな旋律が主導的で、情熱的な中間部を経たのち、無類の美しさを込めた静謐な時間が訪れる。ロンド形式の第3楽章「終曲」は、暗く沈んだようなピアノの前奏から、一気に高みへと駆け上がって朗々と甘美な旋律を奏で、華々しいフィナーレを飾る。